

二　　つ　　の　　希　　望

——1956年度總會における挨拶——

小　倉　金　之　助

昨年の總會には、病氣のために、出席できませんでした私が、ことしは會員の皆さんにお目にかかることができ、まことに嬉しく存じます。今日のごあいさつの言葉として、二つの希望を述べさせていただきます。

本會もようやく順調な成長をとげるようになり總會が年々意味ふかいものになつてきましたこと、また本會には数多くの専門的分科會が生まれ、それらが活潑に動きだしたこと、さらに各支部の活動がますます盛んになつてまいりましたこと、こういつた本會の成長につきましては、皆さんと共に、喜びを分かちたいと存じます。

ところで数名の會員諸君から私に、本會と歴史の諸學會との間に、お互に密接な連絡をとつてはどうかという希望を伝えられましたが、これには私もまったく同感です。

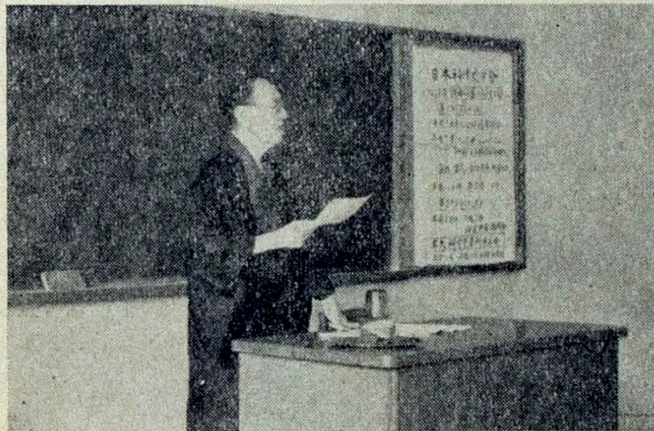
科學が人間の歴史のなかで、どういう役割を果たしてきたか、現にどういう役割を演じつつあるか。こういつたことは出来るだけはずきりと知つていなければならないことです。それで科學史家をもつと歴史に對して深い關心を寄せると同時に、他方、歴史家をして、もつと科學史に注目させる必要があると思います。

バナールの“歴史における科學”という勞作は、たしかに見事な一つの收穫に相違ありませんが、もちろんあれで盡されたわけでは決してありません。とくに東洋の科學、日本の科學につきましては、新らしい科學の光りと、新らしい史學の構想のもとに、むしろこれから本格的な出發をはじめなければならないのだと考えられます。そしてそれにはどうしても歴史の諸學會との協力研究に待たなければならないことが、きわめて多い。

それも細々しい枝葉の點でなく、むしろ科學史の根本的な諸問題について、とくに協力を必須とすると思われるのです。つい四、五日前に法政大學の大學院で日本史を研究している一人の青年が、誰の紹介もなく私のところにやつてきて、日本の科學史に關する私の論文を借りて行きました。全く知らない人でしたが、こういう人の出るのは非常に悅ばしいことです。じつさい、これまでの日本の歴史家たちは、日本の科學についてあまりに無知だつたと思います。どうぞ本會と歴史諸學會との連絡が、できるだけ早く實現されるように、皆さんの盡力をお願いしたいものです。

つぎには、科學史の研究に關する國際的連絡です。私は、科學史研究連絡委員會の方々のご盡力によりまして、國際的な連絡が相當うまく行われていますことを、日ごろ感謝しているものです。

この際私がとくに申し上げたいのは、中國の科學史家との交流のことです。昨年中國科學院の學術視察團がこられましてから、多分皆さん方のところにも、いろいろ參つていと存じますが、近ごろ私のところにも、中國の科學史家から、それどころでなく、全く思いもよらない内蒙古や臺灣の科學者や勤勞者から、手紙や書物を送つてきます。さらに中國科學院の副院長からは、私の數學史に關する著書と論文の翻譯を許されたいという、希望が伝えられています。こういつた交流は、決して少數の個人に限られた問題ではないと考えますので、私はとくに連絡委員の方々のご協力をお願いしたいのであります。私の第一の希望はこれで終わりますが、要するに、それはいろいろの意味で、もつと“窓をひらけ”ということでした。



これから第二の希望を申し上げます。戦後はとかく解説風の書物が流行していますので、今日になつても、科学史といえは、まだ解説風のものが多し現状です。もちろんすぐれた解説書の出版は一般人の啓蒙の上にも、科学思想の普及の上にも、きわめて大切なことは申すまでもないことです。けれども科学史研究についての能力が、ヨーロッパ人やアメリカ人に比べて決して劣るとは思われない、日本の科学史家たちの仕事が、眞剣に取つてくんだ自主的な獨立した研究よりも、二、三の權威にたよる解説を主としたり、また原資料の検討による正確緻密な研究よりも、實際の裏付けの少い方法論に終つたりするといった傾向については、ふかい反省を要すると考えます。

私は以前から科学史の名に値するような科学史は、少くとも科学發展の前途を照らすもの、“科学の前進のために照明をあたえるもの”でなければならぬと考えてきました。それには何よりもまず眞剣に研究された獨創性のあるものでなければならぬと、今日でも考えております。そうでない科学史というのは、ただ數學や、物理・化學や、生物学や、技術などに寄生している、いわば寄生蟲的存在であると信じます。場ちがいかも知れませんが、どうぞソヴェートのミコヤンの有名な演説の一節を引用することを、おゆるし下さい。

“わが黨のなかには、理論的にたかく、マルクス・レーニン主義の古典の諸勞作をよく習得した經濟學者、歴史家、哲學者、法學者、その他が非常にたくさんいる。しかし、これらの知識の効率率はきわめて小さく、わが國には、ふかいマルクス・レーニン主義的な創造的な研究活動が感じられない。わが國の理論家たちの大部分は、ふるい引用文、定式および命題をさまざまなかたちでくりかえし、ひねくりまわすことに没頭している。創造のない科学とは、いつたいどんな科学だろう？ それはむしろ學校生徒の勉強であり、學課のおさらいであつて、科学ではない。なぜなら、科学はなによりもまず創造であり、あたらしいものをつくることであつて、おそわつたことのくりかえしではないからである。”

こういう意味から私は、今日これから行われまうシムポジウム、“わが國における科学技術の輸入”—このシムポジウムに對しまして、大きな期待を寄せているものです。何と申しまして、“明治以來の日本科学史”は、総合的なものとはにかく、少くとも個別科学史は、たといそれがどんなに困難であろうとも、原資料による嚴密な批判・検討のもとに、皆さんの手によつて、できるだけ早く作つていただきたいのです。これが私の第二の希望であり、心からの願ひです。

皆さん、日本科学史の立場からみますと、この數年間は、じつに思い出のふかい記念の年なのです。たとえば昨年 1955 年は日本人がオランダ人からはじめて數學・理化・造船・航海術などを學んだ長崎の海軍傳習所が開かれた滿 100 年、ことし 1956 年は蕃書調所の開設、すなわち西洋の書物を研究する徳川幕府の機關が獨立をはじめた滿 100 年にあたります。また昨年は、數學の菊池大麓、天文學の寺尾壽^{ひさし}、氣象學の中村精男^{きよお}諸先生の誕生 100 年で、今年は物理學の田中館愛橘、地質學の小藤文次郎^{ことろ}、植物學の松村任三、機械工學の井口在屋^{いのくちありや}諸先生の誕生 100 年にあたります。こういう記念の年に開かれる本會のシムポジウムはきわめて意味ぶかいものでなければなりません。

で、あいさつのおわりに、もう一言添えることをお許しください。私は菊池大麓先生、寺尾壽先生、中村精男先生、田中館愛橘先生、それにケミストリーの櫻井錠二先生、こういつたいいわゆる元老の諸先生から、親しく講義をきいたり、あるいは對談や文通によりまして、直接に教をうけることができた人間です。そういう私に取りましては、わが國における科学の傳統が、じつに底の浅いものであることを、つくづく痛感するものです。また日本の歴史というものは、他人から與えられたものではなく、まつたく自分たちが自分たちの力で作つているのだと、考えております。それから、ほんとうに“國民の科学”という名に値するものは、どうしても私たちが、これから作りあげなければならないのだと、日ごろ考えております。これでごあいさつを終ります。